

〔研究論文〕

ゴノケンドロ<sup>(1)</sup>の活動とその意義  
**Ganokendra**

北村 優子

〔Article〕

**Experience of Ganokendra in Bangladesh: Its Contribution to Human Development**

Yuko KITAMURA

**Abstract**

Education in Development is currently one of the major concerns within international affairs. Development has itself been a significant concept particularly since the end of the Second World War, with much practice aimed at improving people's lives. Enhancing economic growth was the initial focus of development, but by the 1990s, it was acknowledged that economic development does not and cannot trickle down by itself. Thus, in the 1990s, the concept of human development was considered as a crucial idea in order to increase people's capacity and choices. The significance of education including non-formal education was reaffirmed in development in terms of enhancing people's capabilities.

In this article, the transition of theories on development from economic development to human development will be firstly described. Also how the historical transition affected non-formal education as well as community learning centres (CLC) in development arena will be presented. Subsequently, one of the CLCs in Bangladesh called Ganokendra will be addressed – from my first hand fieldwork experience – in order to understand its contribution to human development.

**はじめに**

戦後の開発概念は経済成長を中心としたものだったが、1990年代には人間開発<sup>(2)</sup>が注目されるようになった。新しい開発の概念の中でノンフォーマル教育を含むすべての教育が果たす役割が改めて認識されることとなった。しかし、教育に関してはフォーマル教育への注目が高く、ノンフォーマル教育や成人教育への関心は決して高いとは言えなかった。ノンフォーマル教育の中でも識字教育プログラムは非識字者人口の多いアジア地域などで多く実施されてきたが、その後の教育(継続教育・生涯教育)機会について触れられているものは決して多くはなかった。そんな中で、「若いころに教育を受ける機会を得ることが出来なかった人はどうしているのだろうか、どうしたらいいのだろうか」という疑問を持つようになった。そんな時にバングラデシュのNGO、<sup>ダッカ</sup>Dhaka <sup>ア-サニア ミッション</sup>Ahsania Mission (DAM) と出会った。このNGOでは<sup>ゴノケンドロ</sup>Ganokendra というコミュニティベースの学習センターを支援している。期間が設けられた識字教育プログラムを修了した者やコミュニティが継続して学習できる場所を求めたことがGanokendraを地域の人々とDAMがつくるきっかけだった。こ

れらを利用する人、運営方法に興味を持ち2006年にGanokendraを初めて訪れた。

本稿では、まず経済成長中心の開発概念が人間を中心としたものによって変わっていった流れについて考察し、開発の枠組みの中で教育の理解のされ方が同じく変化しノンフォーマル教育やコミュニティ学習センター(CLC)への関心が高まってきていることに触れる。そして、筆者が調査のために訪れたバングラデシュのGanokendraが人間開発に大きく貢献することを述べたい。

## 1. 開発概念の変化: 経済成長中心から人間開発へ

開発とは、「世界中の人間の潜在能力を満開にさせる」ことだが、これは文化と教育の最終目標でもある。アジアでは、教育は「開発の原動力」として、また文化は開発の重要な手段であると同時に完全な部分として協調されている<sup>(3)</sup>。

開発と教育が深い関係であることは上記の引用文からも分かるが、開発の概念は時代とともに変化してきた。そして、開発の枠組みの中で教育に対する考え方もそれと同じく変わっていった。「開発」の概念が経済成長<sup>(4)</sup>を中心としたものからどのようにして人間開発へとつながっていったのかをまずここで記したい。1950、60年代は戦後復興のための大規模なインフラ整備や農業発展が開発の中でもっとも強調されていた。この頃の開発は経済成長とほぼ同意義で用いられていた<sup>(5)</sup>。しかし、1970年代からは社会福祉の考えから貧しい人々の幸福(well-being)が開発の中心へと変わっていった<sup>(6)</sup>が、開発=経済成長とまだとらえられていた<sup>(7)</sup>。そして、1990年代には経済開発だけでは不十分である<sup>(8)</sup>ことが認識され、社会の豊かさを測るのにこれまでの経済指標には反映されてこなかった部分も考慮されるべきだという議論から人間開発の概念が登場した。

1990年にUNDP(国連開発計画)が『人間開発報告書』を発刊し、人間開発(開発)が目指すべきものがはっきりと示された。UNDPによると、開発の目標とは「人間が自らの意思に基づいて自分の人生の選択と機会の幅を拡大させること」であり、「健康で長生きすること」「知的欲求が満たされること」「一定水準の生活に必要な経済的手段が確保できること」などが本質的な選択肢として含まれている<sup>(9)</sup>。さらに、「豊かさ」の真の意味として、「教育を受け文化的活動に参加できること、バランスのよい食事がとれて健康で長生きできること、犯罪や暴力のない安全な生活がおくれること、自由に政治的・文化的活動ができて自由に意見が言えること、社会の一員として認められ、自尊心を持てること」が挙げられている。これらが一つでも欠けるといくら経済成長率が上がり物質的に満たされていたとしても本当の意味で豊かになったとは言えないと理解されるに至った<sup>(10)</sup>。また、これらを実現するためには、教育の果たす役割が非常に大きいことが分かる。ここで言う教育とは単にフォーマル教育のみを指しているわけではなく、ノンフォーマル教育も含まれる。ノンフォーマル教育の利用者は就学前の子どもから基礎教育を中退した児童生徒、そして様々な理由からフォーマル教育で学ぶ機会を得ることが出来ず非識字者となっている大人までいる。ノンフォーマル教育によって今まで制限されていた情報へのアクセスや自由な政治的・文化的活動が可能となったケースは多い。ノンフォーマル教育については後のセクションで加筆する。

経済成長を中心とした開発が批判されてはいるが、世界の富を増大させ、それにより人々の生活が様々な技術の進歩により向上したことは否定できない。しかし、ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書『学習：秘められた宝』の中でも指摘されているように、「経済成長のみに基づく開発という形態は著しく不公平なもの<sup>(11)</sup>であったとの見方も広くされている。この不公平さを上記の報告書<sup>(12)</sup>の中では次の点から述べられている：

- ・75%以上の人間が開発途上国に住んでいながら彼らは世界の富の16%しか所有していない
- ・人口総数5億6000万人を擁する最後途上国における1人当たりの年間所得は減少しつつあり、
- ・他の途上国の平均所得が906ドル、先進国の平均所得が2万1598ドルであるのに対して、わずか300ドルに過ぎない

経済成長を中心とした開発期であっても、教育への投資は重要視されていた。しかし、この場合は主に人的資源のための教育が中心であった。つまり、教育を通していかにより多くのスキル労働者を育て、彼らが国の経済発展に貢献してくれるのかがメインであったと言える。

## 2. 経済成長中心時代の教育

上記では開発概念の時代的变化をみてきたがここでは、それらがどのように教育と関係をもってきたのかを考察したい。戦後から人間開発の概念が生まれる1990年代までは、経済成長により人々の生活が豊かになると考えられていた<sup>(13)</sup>。開発＝経済成長と捉えられていた時代には、教育は人材育成のための手段であると理解されていた。1960年代にはセオドア・シュルツ(Theodore w. Schultz)が、経済成長と人材育成の相関性に注目し人的資本(human capital)に関する論文を発表した<sup>(14)</sup>。人的資本論では人を資本と捉え、教育への投資が生産性や所得を向上させるということを計量的に明らかにすることが試みられた。この影響もあり1960年～1980年にかけては途上国、新しく独立した国々を中心にフォーマル教育を普及させることが優先課題の一つになっていた<sup>(15)</sup>。教育と雇用機会の拡大については多くの研究者により論じられているが<sup>(16)</sup>、学校教育と経済成長との関連性について疑問を投げかける学者もいる<sup>(17)</sup>。彼らの主張としては、学校教育を修了した者はしていない者に比べて雇用機会が増しているかもしれないし、より多くの給与を手に入れているかもしれない。しかし、それらが国内の経済成長に直接的に貢献しているとは必ずしも言えないのではないかというものだ。こうした議論は今もおされている。

しかし、経済成長と教育を考えた場合であっても、ある程度の学校教育や職業訓練を修了するだけでは十分とはいえず、「もはや教育に求められているのは、安定した産業における職業に対する人材を育成することではなくて、むしろ革新的で、自らを発展させ、急速な変化に対応し、その変化を同化できるような人材を育成しなければならないのである。」<sup>(18)</sup>とユネスコ「21世紀教育国際委員会」は報告書の中で主張している。

経済成長と教育については議論され続けている大きなテーマであるが、以前よりも現在の方が教育への関心は増している<sup>(19)</sup>。教育を通しての人材養成、そしてそれによる経済的な貢献を開発と教育の枠組みの中で長い間見られてきたが、1980年代後半からは人間開発という新たな概念が登場し教育に対しての期待も変わってきた。

## 3. 人間開発と教育

斎藤によると、「社会開発<sup>(20)</sup>や人間開発を開発と考える立場に立てば、貧しい人々のエンパワメントに資することが教育にも求められる」<sup>(21)</sup>という。また、ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書の中では、教育の主たる機能の一つとして、「いかに自己開発を促すかということ」<sup>(22)</sup>が挙げられている。人間開発は、「人間が自らの意思に基づいて自分の人生の選択と機会の幅を拡大させること」<sup>(23)</sup>を目標としている。人間開発の中では教育は目標達成の中核部分だといえる。

経済成長するためのスキル労働者を育てる教育(手段)から、個々の人生を、個々が属する社会を豊かにするための教育へと変わり、人が主役となる大きな変化が起きた。『学習：秘められた宝』は、「教育は例外なくしてすべての人に、自らの運命を自らに託させ、個人と共同体双方の責任ある参加のうえに築き上げられる自らが属している社会の進歩に貢献させなければならない」<sup>(24)</sup>とも述べている。実際に教育が経済成長以外に注目された例として女子への教育とそれによって生じた成果を挙げることができる。それは、女性の教育レベルと飢餓の減少、病気の減少、非識字率の減少などの間に関連性があることが明らかになった点である<sup>(25)</sup>。さらに、識字教室で学んでいる母親がいる家庭はそうでない家庭と比べ子どもを学校へ通わせる傾向が高いという<sup>(26)</sup>。母親自身が教育を通じてより豊かな人生を送るということの他に次世代へ教育の機会をパスするという役割も成人教育にはあるといえる。

1990年代には「万人のための教育(EFA)」<sup>(27)</sup>政策によりノンフォーマル教育を利用した基礎教育もフォーマル教育と対等なものとして理解されるようになった。しかし、学校教育(フォーマル教育)の場での基礎教育拡充に重点が置かれ、1996年のEFA中間レビュー会議では識字教育やノンフォーマル教育については青年や成人をも対象にし、さらに充実させる必要があることが提言された<sup>(28)</sup>。2001年に採択された「学校外教育(ノンフォーマル教育)のための東京宣言」でも、ノンフォーマル教育とフォーマル教育とが同様に扱われ「多様性に富んだアジア太平洋地域に学びの社会を築くために、学校外教育(ノンフォーマル教育)と学校教育とが互いに補い合うことが理想」<sup>(29)</sup>だと述べられている。人間を中心とした教育への関心が高まり、学童期の子どもを対象とした基礎教育の充実だけでなく、青年や成人をも対象にしたノンフォーマル教育の役割について国際社会で認識されているとはいっても課題は多い。特に学童期に学ぶ機会に恵まれなかった成人が教育を受ける機会を得るということは容易ではない。次のセクションでは、コミュニティ学習センター(CLC)を利用したノンフォーマル教育について触れたい。

#### 4. ノンフォーマル教育とCLC (Community Learning Centre)

様々な理由で基礎教育を終えることが出来なかった多くの成人にとって、読み書きをはじめとした学びの機会を得るにはノンフォーマル教育が非常に大きな役割を果たす。また、基礎教育を修了せずに中退した若者に再び学べる場を提供し、またフォーマル教育の場へ戻る橋渡しとしてもノンフォーマル教育は期待されている。国や地域により多様なノンフォーマル教育の形態が存在しているが、大安によるとアジア・太平洋地域では1990年代からCLCがノンフォーマル教育施設として広がり始めたという<sup>(30)</sup>。これには、EFA実現を目指した動きや2003年から開始された「国連識字の10年」が強く関係しているという<sup>(31)</sup>。非識字者の数が多い地域であることもそうだが、アジアの発展途上国で識字教室を中心としたノンフォーマル教育が多く実施されてきたのも上記による影響があるのだろう。国によっては一定の条件を満たせば、CLCで実施されているノンフォーマル教育(という名がついていても)も政府からフォーマル教育と同じように扱われるものもあり、ノンフォーマル教育といっても複雑である。CLCの概念と機能については日本公民館学会年報第6号(2009)掲載論文「アジア・太平洋地域のコミュニティ学習センター普及と公民館—日本の国際教育協力の視点から—」<sup>(32)</sup>の中で詳しく論じている。

次セクションでは筆者の経験を基にバングラデシュのNGO, Dhaka Ahsania MissionがサポートしているCLC-Ganokendra<sup>ゴノケンドロ</sup>について取り上げたい。

## 5. バングラデシュ <sup>ゴノケンドロ</sup> Ganokendra

Dhaka Ahsania Mission (DAM) では、ベンガル語で <sup>ゴノケンドロ</sup> Ganokendra というコミュニティ学習センターを支援している。DAMが識字を中心としたノンフォーマル教育を始めたのは1981年だという。Ganokendraが最初に紹介されたのは1992年<sup>(33)</sup>。ノンフォーマル教育開始当初は主に学童期に学ぶ機会に恵まれなかった女性を対象として期間を設けての識字プログラムが実施されていた。しかし、プログラム修了後は参加者たちが継続して読み書きを練習し学ぶ機会が少なく、継続学習の場を求めていたようだ。そこで、コミュニティ<sup>(34)</sup>ごとにCLCを作ることを村人に提案し教材をDAMが無償提供したことがGanokendraの最初だという<sup>(35)</sup>。そして、この継続教育も識字学習だけにとどまらず学習者の日常生活で必要とされる知識(健康・衛生など)学習へと幅を広げていった。

また、コミュニティからの直接の支援要望がなくても非識字者の多い地域にはDAMのフィールドスタッフが出向き、村人とGanokendraや学ぶことによって得られるメリットについて話し合いがもたれたという。この場でコミュニティからGanokendra建設が支持された場合には、DAMが地元の人々のオーナーシップを大切にするためにコミュニティの人々自身ですべきこととDAMが支援できる項目を提示する。コミュニティ側の責任としては、①土地は自分たちで探す(コミュニティ内の人による寄付や無償で貸し出されることが多い)、②Ganokendra建設費は自分たちで集める、③Ganokendra建設工事もコミュニティで行う、④コミュニティワーカーはコミュニティの中から選び推薦する。DAMからの支援としては、Ganokendraで利用される新聞や教材、黒板や本棚などの備品の提供、そしてコミュニティワーカーへの謝礼、そして定期的に活動やその他について相談にのりアドバイスをすることである。

コミュニティワーカーはコミュニティの人々から推薦された女性になるが、原則として10年生修了時に受ける中等教育修了試験(Secondary School Certificate)に合格した人でなければならない。しかし、コミュニティの意向を最大限反映させるということで、柔軟に対応されているようである。ただし、DAMによるコミュニティワーカーを対象として実施されている研修を受けなければならない。そして、毎月1回行われる他の地域のコミュニティワーカーとの意見交換の場となる会議に出席することが義務づけられている。なによりも、コミュニティワーカーはDAMスタッフとコミュニティ、そしてコミュニティの人々との窓口役になる他、管理者として総合的な責任を負う立場にある。また、コミュニティワーカーとは別に、運営委員会があり活動内容の批評や再検討を行う。そして、他の支援団体や地元政府などとのネットワーク構築も行っている。運営委員はGanokendraの積立金の管理にも責任を持っている。

活動内容や利用時間帯もコミュニティのニーズによる為、CLCごとに異なる。例えば、就学前の子どもの多い地域では午後13:00～15:00の時間帯の利用希望者が多いのでそれに合わせているのに対し、就学中の子どもの多い地域では子どもが学校に行っている午前中の時間帯の利用者が多い。ただ、午前中に就学前の子どもの対象にしたプログラムや中退した児童生徒のための教育プログラムが実施されているGanokendraではそれらと重ならない形で利用時間が設定されている。

以下では筆者の調査対象地域の概要に触れ、Ganokendraの活動内容とそれらの変化について記したい。

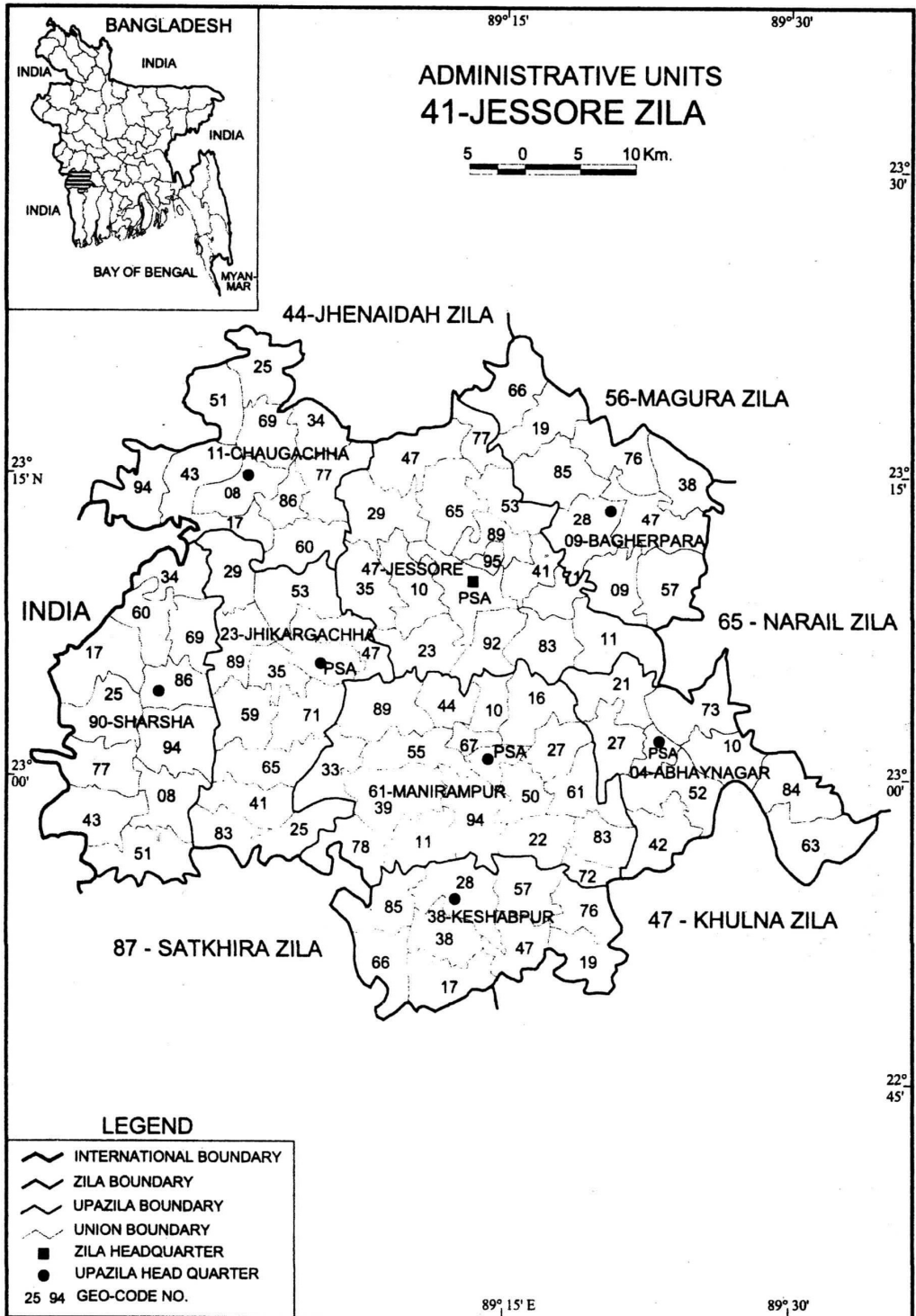
## (1) 調査の概要

筆者が初めて調査のためにジョソール群の Ganokendra を訪れたのが2006年1月～2月であった。2010年2月～4月、2012年4月にも同地域でエスノグラフィック・スタイルアプローチを用いたフィールド調査を行った。2006年の調査では Ganokendra 利用者や関係者へのセミストラクチャーインタビューと観察を中心に情報収集を行った(報告書などセカンダリー・データも利用)。Ganokendra で行われている活動内容や利用者を含む関係者の背景を主に調べ、その活動を通して利用者の生活がどのように向上したのかを理解するよう努めた。2010年の調査では、利用メンバー個人がどのような幼少期を送ってきたのか、そして現在の生活、将来への展望とひとりひとりの人生について理解を深めることが主目的であった。2006、2010年両調査では35名の Ganokendra 利用メンバーに個別インタビューを行った。2012年の調査では、利用メンバー個人というよりもコミュニティ全体がどう機能しているのかを理解し、Ganokendra と利用者、そしてコミュニティについて深く知ることを目指した。個別のインタビューというよりも、グループディスカッション形式でコミュニティ内で重要視されているイベントや過去・最近起きた出来事について聞き取りを行った。また、それぞれの調査では DAM のフィールドスタッフや本部での関係スタッフ、女性利用者の夫、そしてコミュニティワーカーへのインタビューも行った。2010年調査ではこれら関係者の他に地区内の小学校長、中学校長、区長からも話を聞くことができた。

これらのフィールド調査は特定の仮説や理論を試すものではなく、調査の目的やテーマそのものがフィールド調査の進行過程と深く関わり合いながら同時に進み、それらをつくり上げていく帰納的なものであった<sup>(36)</sup>。しかし、本稿では方法論的な議論よりも今後の国際教育協力分野での可能性を探る資料となるよう特定地域の Ganokendra について利用メンバーや活動を大きな動きでまとめることとする。

## (2) フィールド調査エリアについて

訪問先のジョソール郡(Sadar Upazila)は DAM が Ganokendra を始めた当初から積極的に活動している地域の一つである。ジョソール郡の中には15のユニオン(Union: 地方行政区(市))があるが、主にアラブプールユニオン(下記地図の10番)とチュラモンカティユニオン(下記地図の29番)を中心に15～20箇所<sup>(37)</sup>の Ganokendra を回った。ジョソール郡はバングラデシュ南西部のクルナ管区(Division)のジョソール県(district)に位置している。



Cartography & GIS Project, BBS 2006

Ganokendra の活動とその意義

アラブプールユニオンとチュラムンカティユニオンの人口はほぼ同数である。しかし、チュラムンカティユニオンの方が約2,000エーカーほど広い。この表では7歳以上を対象にした識字率が載っているがチュラムンカティユニオンの方が10%程低い。近年、この地域の子もたちの大半が小学校へ入学していることを考えると青年、成人のみの識字率を出すとするとさらに低いものとなるのではないだろうか。

表1 面積、世帯、人口&識字率の男女比較

| ユニオン名                      | 面積<br>(エーカー) | 世帯数   | 人口 (人) |        |        | 識字率 (7歳以上) (%) |       |       |
|----------------------------|--------------|-------|--------|--------|--------|----------------|-------|-------|
|                            |              |       | 合計     | 男      | 女      | 合計             | 男     | 女     |
| アラブプール<br>(Arabpur)        | 5,932        | 7,005 | 33,471 | 17,378 | 16,093 | 57.23          | 61.75 | 52.37 |
| チュラムンカティ<br>(Churamankati) | 8,045        | 7,133 | 32,970 | 17,084 | 15,886 | 47.76          | 51.69 | 43.59 |

Population Census-2001: community series, zila: JESSORE, 2006, pp.63-64より作成  
※原文は英語。日本語訳は筆者による。

表2は、10歳以上の主活動について示したものである。そもそも10歳の子どもに対しても仕事の内容を質問するということがバングラデシュ農村の現状が現れている。しかし、小学校1年～5年生のみが義務教育のバングラデシュでは必要な質問項目になる。アラブプールユニオン(33%)もチュラムンカティユニオン(32%)も<家事>労働従事者が最も多い。続いて<無職>が多くなっている。<農業>が3番目に多いが(<その他>を除いて)、アラブプールユニオンが9.5%なのに対してチュラムンカティユニオンは21%となっており農業従事者が多いことが分かる。確かに、この地域を訪れるとアラブプールユニオンに比べ大きな規模の田畑が目立っていた。アラブプールユニオンの方が市街地に近いという立地からなのか、<水道・電気・ガス>、<ホテル・レストラン>、<建設>、<交通>、<ビジネス>、<サービス>、<求職>では若干チュラムンカティユニオンよりも割合が高い。しかし、全体的な傾向は両ユニオンとも似ているといえる。

表2 10歳以上の人口&主活動

| ユニオン名                      | 合計<br>(人) | 無職             | 求職中           | 家事             | 農業              | 製造業           | 水道<br>電気<br>ガス | 建設業           | 交通            | ホテル<br>レストラン  | ビジネス            | サービス          | その他             |
|----------------------------|-----------|----------------|---------------|----------------|-----------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|-----------------|---------------|-----------------|
| アラブプール<br>(Arabpur)        | 25,796    | 7,342<br>(28%) | 659<br>(2.5%) | 8,657<br>(33%) | 2,455<br>(9.5%) | 373<br>(1.4%) | 45<br>(0.17%)  | 623<br>(2.4%) | 571<br>(2.2%) | 32<br>(0.12%) | 1,508<br>(5.8%) | 96<br>(0.37%) | 3,435<br>(13%)  |
| チュラムンカティ<br>(Churamankati) | 25,034    | 6,992<br>(27%) | 424<br>(1.6%) | 8,033<br>(32%) | 5,334<br>(21%)  | 351<br>(1.4%) | 17<br>(0.06%)  | 412<br>(1.6%) | 416<br>(1.6%) | 18<br>(0.07%) | 1,285<br>(5.1%) | 59<br>(0.2%)  | 1,693<br>(6.7%) |

Population Census-2001: community series, zila: JESSORE, 2006, pp.167-168より作成  
※原文は英語。日本語訳、人口に対する割合(%)は筆者による加筆



### (3) <sup>ゴノケンドロ</sup>Ganokendra利用メンバーについて

DAMによると、Ganokendra利用者の年間世帯収入はおよそ24,000タカ(350-400ドル)だという。1人当たり500タカ/月以下だと困窮者だと判断される。現地調査で会うことができた成人利用者の年齢層は18歳～40歳後半で、もっとも多かったのは20歳代であった。年齢が上がるにつれ利用者の割合は下がっていった。ただ、この地域の場合、出生届けが義務付けられたのが2006年からのため、自分の誕生日を知らなかったりインタビューしているなかで子どもとその人の年齢差が合わない場合もあった。活動内容やGanokendra利用メンバーには2006年時点と2012年4月では大きな変化があった。

### (4) 活動プログラムそして変化

Ganokendraは全ての人が利用できる施設であるが、当初はメンバーの構成はコミュニティとDAMによって決められていた。より弱い立場に置かれている人に優先的にGanokendraを活用してもらうために、第1ターゲットグループと第2ターゲットグループに分けられていた。この両グループのメンバーは識字学習やその他の活動に優先的に参加できるよう配慮されていた。両グループのメンバーは合計100名いるが、第1グループのメンバーは非識字者が継続して学習が必要な新識字者である。100名のメンバーの75%がこの第1グループに当たる。第1グループに入らなかった25%のメンバーは自動的に第2ターゲットグループになる。第1、2ターゲットグループ内のメンバー構成はそれぞれ75%は女性で、残り25%が男性になるよう決められていた。

1990年代にGanokendraができたばかりの頃は、各Ganokendraの活動は識字学習がメインでありその後、社会啓発プログラムとして、健康・衛生、栄養知識、HIV/AIDSの理解と予防法、人身売買、早すぎる結婚、人権について、そしてマイクロクレジットプログラムの一環で預金管理、さらに借入をして小規模ビジネスをするメンバーやビジネスの為の技術訓練を受けるメンバーが出てきた。技術訓練としては、手工芸(刺繍、編み籠など)や家畜(ヤギ、牛、ニワトリなど)・農業(野菜、きのこ栽培)が多い。また、GanokendraはDAMの支援によってつくられたが、コミュニティの判断で他の支援団体によるプログラムや行政サービス提供場所としての機能も果たすようになっていった。特別なプログラム以外にも、村での集会場として使われたり、結婚式や宗教行事など様々なイベントの際にも利用されることが多い。

2006年の調査時には、識字学習の場として利用しているメンバーとGanokendraで顔を合わせる人があったが、2010年には新聞や新識字者用に提供されている本を読みに来る人が増えていた。また、コミュニティの中でGanokendraが別の場所に移動しているケースも見られた。理由としては、土地所有の問題があり移動せざるを得なかった、今までの場所では通うことができなかった人が多いエリアにコミュニティ内で移動するべきだという意見がでたなどがあった。また、かつては第1ターゲットグループと第2ターゲットグループに分かれていたが、現在はそのような形でのメンバー分けはされておらず、普段は図書館のような機能を持ち本、雑誌、新聞を読み様々な世代の人が利用していた。主婦層の人は物語や新聞の人生相談コーナーを読むのを好む人が多かった。10代後半の若者は新聞の求人欄に目を通していたり、ファッション情報のある雑誌を好んでいた。2012年には、2010年と同様に図書館のような感覚で本が読みたいと思った時にGanokendraを利用するというメンバーが増えていた。また、Ganokendraには刺繍などの内職をする人が集まって仲間で話しながら作業を進めていた。他に、日用品を仕入れてGanokendraに人が集まる時間帯を選んでそれらを売りに来る女性メンバーもいた。また、特別目的があるわけではないけれど、

「Ganokendra で人が集まって今日は何の話しをしているかな？」と思いながら歩いて家から出てくる人もいた。

相談場所として Ganokendra を利用する人も少なくない。コミュニティワーカーが相談役になる場合や他の利用メンバーからもアドバイスをを行うことがある。具体的な例としては、子どもに勉強を教えたいという想いをもちコミュニティワーカーに自分の子どもが学校で学習している科目を教えて欲しいと申し出る母親もいた。また、夫や義理の母親から15歳の娘の結婚を勧められたが自らが15歳ごろに結婚をし、その後苦労してきたという経験から、娘には勉強を続けて欲しいと願う一方で夫や義母に何も言えないもどかしさを感じ、Ganokendra にある『早すぎる結婚』についての本を読み娘を今結婚させたくないという自分の考えを再認識している母親の姿もあった。その母親はそれでもどうしていいのかわからず『女性の権利』についての本を読みGanokendra にたびたび来ていた。旦那が Ganokendra に来ていることを知ったら厳しく叱責されてしまうため、旦那が仕事で家を空けているときにこっそりと Ganokendra を利用していた。2010年の調査で彼女とゆっくり話す機会があったが、2012年にもこの女性と会うことができ、娘さんの結婚をどうしたかと聞くと、「大変だったけれど、娘は今カレッジ(11,12年生)で勉強を続けている」とニコニコしながら話してくれた。「夫と義母は結婚の準備をしていたが、一生懸命考えてまず夫を説得しようと思った」とのことである。さらに話しを聞くと、「義母は夫の言うことは聞いてくれるので、夫にカレッジに行った方が娘は良い人生を歩むことができるし、私は周りの友達が学校で楽しく過ごしている時に結婚して悲しい想いをした。だから娘に悲しい経験をさせたくない」と話しをしたそう。夫を完全に説得するのは難しかったが「とりあえず、12年生が終わるまでは待つ」との返事だったそう。彼女は Ganokendra メンバーにも自分が置かれていた状況を話すことが当初はできずに一人で本を読みGanokendra を利用していた。しかし、本を読んで自分の考えに自信を持ち始めてからはコミュニティワーカーに相談をするようになった。彼女はかなり離れた村から嫁いできたので彼女の中にはコミュニティに溶け込み切れていないという想いがあったようだが、Ganokendra を利用することにより、問題を他のメンバーと共有することが出来るようになり時間はかかったけれど明るく話しができるようになっていた。

## 6. <sup>ゴノケンドロ</sup>Ganokendra を通じて豊かな生活へ

本稿で細かい個々のメンバーの経験についてすべて書くことは難しいが、Ganokendra の生まれた経緯と活動の大きな流れを説明した。経済成長のための手段だと教育が捉えられていたら、Ganokendra のようにコミュニティレベルで学ぶ場はあまり評価されることがなかっただろう。確かに、職業訓練のプログラムも実施され、小規模であっても自らビジネスを行い生計を立てるメンバーもいる。しかし、Ganokendra を利用しているメンバー全てが積極的に収入向上プログラム (income generating activities) をしたいと思っているわけではなかった。情報を得るために読み書きの練習や本を読みにくることを目的として Ganokendra を利用する女性が多いということが今回得られた新たな知見のひとつとなった。知識を得ることによって生活に変化が生まれ学ぶこと(知ること)の意義を実感している様子が彼女たちの活動の様子を観察した話をする中で良く伝わってきた。彼女たち自身が意識的に自らのために Ganokendra を利用するというよりも、家族(特に子ども)のためという気持ちが強いといえる。

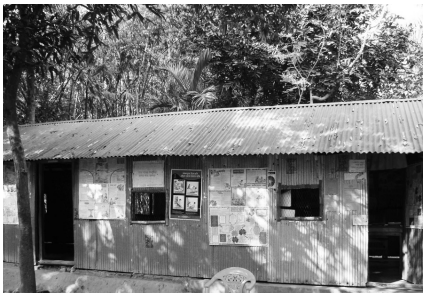
本稿では彼女たちの生活行動範囲やコミュニティが昔から共有している女性像について触れなかったが、特別な理由がなければ彼女たちは自分たちのコミュニティの外にでることはない。そ

ういう女性が多かった。ひとつのGanokendraがカバーするエリアは直径500メートル程である。Ganokendraが出来てから少しずつ移動範囲が広まったという人もいた。収入向上プログラムとして、仕立てた服を市場に売りに行ったり、生地を仕入れに行ったりするメンバーもいた。彼女たちと話をしながらどうしてコミュニティの中、しかも500メートルという狭い(少なくとも筆者にとっては)範囲でGanokendraが必要とされているのかが理解できた。また、強い風が吹いたらつぶれてしまいそうなGanokendraが10年以上も姿を消さずに、利用者や目的が少しずつ変化しながらもその場にあり続けている理由が分かった。「今まで字が書けなくても困ることはなかった。私には識字学習は必要ない。」と思ってGanokendra利用を勧められても断っていた人もいた。しかし、小さなコミュニティ内では、Ganokendra利用者たちの生活が少しずつ変わっていくのを近くで見ることとなり、Ganokendraに興味のなかった人も参加してみようかという気持ちに少しずつ変わっていく。また、なかなか字が書けるようにならずに途中であきらめGanokendraを利用する回数が減る人もいたという。そんな時にコミュニティワーカーが勇気づけ寄り添ってサポートをしてきた。こういう個々に応じたサポートができるのはコミュニティベースの利点である。実際には、Ganokendraがコミュニティ内にできたからといって短期的に変化が現れるわけではなく何年もの時間をかけ、メンバーやコミュニティが迷い、悩み、試行錯誤を繰り返す少しずつ生活面や人々の内面に変化が起き、各コミュニティ内でのGanokendraが存在している。

「人間が自らの意思に基づいて自分の人生の選択と機会の幅を拡大させること」<sup>(38)</sup>という人間開発の目標と照らし合わせてもGanokendraの存在がこれに貢献していることがわかる。Ganokendraはコミュニティがその時に必要としていることが反映されやすい環境にある。それは個々やコミュニティによって異なっているが、それらに答えようとメンバー、コミュニティ、そして支援している関係者が行動をとれることがコミュニティベースの活動の最大のメリットと言える。Ganokendraは小さなコミュニティという枠の中での活動ではあるが、人間開発と深く関係しており人々のより豊かな生活のためには長期的に重要なものであることは間違いない。

## おわりに

開発概念の変化とそれらの中で教育の役割がどのように解釈されてきたのかを考察してきた。本稿ではバングラデシュのGanokendraについて筆者が経験した一部を取り上げ、コミュニティベースだからこそ柔軟な活動ができ、それが「より豊かな生活」を生むことを利点として挙げた。今後の研究では現地のニーズや文化をより深く理解したうえで、具体的に国際教育協力という視点でどのような活動ができるのか提示できればと考えている。



Ganokendra 外観例



Ganokendra 内装例

- (1) Ganokendraはベンガル語であるが直訳すると「人々のセンター(People's Centre)」という意味。しかしユネスコが使っているコミュニティ学習センター(Community Learning Centre(CLC))として一般的には訳されている。
- (2) UNDP(国連開発計画)「人間開発ってなに?」、2003.7(2007.2改訂) [http://www.undp.or.jp/publications/pdf/whats\\_hd200702.pdf#search=undp 人間開発](http://www.undp.or.jp/publications/pdf/whats_hd200702.pdf#search=undp%20人間開発), [2012年6月17日閲覧]
- (3) ツアウ・ナンツァオ(Zhou Nanzhao), ユネスコ「21世紀教育国際委員会」(The International Commission on Education for the Twenty-first Century) 報告書 監訳 天城勲、『学習：秘められた宝』(Learning: The Treasure Within), 1996, pp.196-197、ぎょうせい
- (4) 経済成長とは経済規模が継続的に拡大することであり、多くの場合GDPの成長率などによって示される。生産活動を活発にし、雇用を増やすことで貧困の解消を目指すのである。斎藤文彦『国際開発論』2005 p.25
- (5) 斎藤文彦『国際開発論』2005 p.133、日本評論社
- (6) Welfred, L.D., *The Conversation of Economic Development*, M.E. Sharpe, NY, 1997
- (7) 斎藤文彦前掲、p.133
- (8) 参照：Haq M., *Reflections on Human Development*, Oxford University Press, Oxford, 1995, Sen A., *Development as Freedom*, Oxford University Press, Oxford, 1999
- (9) UNDP前掲, pp.5-6
- (10) 参照：Haq M., *Reflections on Human Development*, Oxford University Press, Oxford, 1995, Sen A., *Development as Freedom*, Oxford University Press, Oxford, 1999
- (11) ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書前掲p.51
- (12) 同上
- (13) 近代化論の影響があったとされる。参照：斎藤文彦前掲、pp.25-30
- (14) Schultz Theodore W. “Investment in Human Capital”, *American Economic Review*, Vol.51, No.17, 1979年にノーベル経済賞を受賞
- (15) 斎藤文彦前掲、p.134
- (16) 参照：Barro R.J “Economic Growth in a Cross Section of Countries”, *Quarterly Journal of Economics*, 1991, Vol.106, Iss.2, pp.407-443, Benhabib J. and Spiegel M.M “The Role of Human Capital in Economic Development: Evidence from Aggregate Cross-Country Data”, *Journal of Monetary Economics*, 1994, Vol.34, Iss.2, pp.143-174, Chauhan C.P.S. *Modern Indian Education*, Kanishka Publishers, New Delhi, 2004, 他
- (17) 参照：Bils M. and Klenow P.J “Does Schooling Cause Growth?”, *The American Economic Review*, 2000, Vol.90, Iss.5, pp.1160-1183, Pritchett L. *Where Has All the Education Gone?*, Policy Research Working Paper 1581, World Bank, Policy Research Department, Poverty and Human Resources Division, 他
- (18) ユネスコ「21世紀教育国際委員会」前掲pp.52-53
- (19) 斎藤文彦前掲、p.129
- (20) 社会開発と人間開発は同意義に理解されることもあるが、明確に区別される場合もある。しかし、開発と教育の大きな流れを理解することが目的の本セクションでは社会開発の定義についての議論は割愛する。西川潤編『社会開発：経済成長から人間中心型発展へ』有斐閣選書、1997年、第一章では「社会開発」の概念の発展過程が説明されている。
- (21) 斎藤文彦前掲、p.129
- (22) ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書前掲p.59
- (23) UNDP前掲, p.5
- (24) ユネスコ「21世紀教育国際委員会」前掲p.60
- (25) UNDP *Human Development Report 2003*, Oxford University Press
- (26) Eisemon T.O., Marble K., Crawford M., Investing in adult literacy: Lessons and implications. In Wagner D.A., Venezky R.L., & Street B.L., *Literacy: An International Handbook*, Boulder, CO:Westview Press, 1999
- (27) UNESCO, Education for All (EFA), 1995-2011  
<http://www.unesco.org/new/en/education/themes/leading-the-international-agenda/education-for-all/> [2012.6.20閲覧]
- (28) 小林和恵『非識字問題への挑戦—国際社会の取り組みとフィールドからの活性化の試み—』、2002、平成13年度国際協力事業団準客員研究員報告書、p.i
- (29) ACCU 学校外教育のための東京宣言、2001  
[http://www.accu.or.jp/jp/activity/education/tokyo\\_statement\\_jpn.html](http://www.accu.or.jp/jp/activity/education/tokyo_statement_jpn.html) [2012.6.20閲覧]
- (30) 手打明敏・大安喜一「ユネスコ主催CLC国際セミナー報告」『日本公民館学会年報第5号』2008, p.75

- (31) 同上
- (32) 手打明敏 pp.61-73
- (33) DAM *Ganokendra: Peoples Centre for Lifelong Learning & Community Empowerment*, 2011, p.3
- (34) ユニオン>ワード(地区)>グラム(村)>パラ(村の中のまとまり)という区分があるが、Ganokendraのカバーするコミュニティはパラよりも小さなコミュニティであったり、異なるパラの一部が合同でGanokendraをつくるケースもある。行政区分によって出来るのではなく、人々の便宜に配慮している。
- (35) 2006年フィールド調査スタッフへのインタビューから。
- (36) 分析ではインタビューデータ、観察データ、フィールドノートをまず、オープンコーディングしそれらと比較しパターンとカテゴリーにまとめ調査エリアで起きている現象をつかむ。
- (37) 訪問箇所幅があるのは、Ganokendraの場所が移転している場合もあり、同じ名前のGanokendraであっても実際には利用者や活動内容に変化がみられたため。
- (38) UNDP前掲, p.5